

2月18日から20日まで、北部準州のダーウィンを訪問しました。在シドニー総領事がなぜシドニーから飛行機で4時間半のダーウィンに行くのかと疑問を持たれる方もいらっしゃるかもしれませんが、ご説明すると、在シドニー総領事館はシドニーが位置するニューサウスウェールズ州とともに北部準州を所轄しています。また、2月19日は、太平洋戦争で旧日本軍が1942年にダーウィンを初めて空爆した日（1943年11月までの間にダーウィンを計64回空爆）で、オーストラリア本土が初めて外国による大規模な攻撃を受けた日ということもあり、例年慰霊式典が行われており、こちらに出席して献花をするために、初めてダーウィンに行って参りました。

実は、シドニー出発前夜には、ダーウィンで日本の名誉総領事を担っている、ジェームズ・パスパレー氏とシドニーで会う機会があり、ダーウィンと日本との繋りを予習できました。同氏は、ダーウィンで真珠を採取・養殖している、豪州最大の真珠採取企業で、北部準州と西豪州を代表するバスパレー社の取締役です。なぜ、このような人が日本の名誉総領事をしているのか興味を駆り立てられたので、日本との縁を調べてみたところ、同社は、まだ対日感情が厳しかった1950年代から真珠養殖に関する日本の専門家をオーストラリアで雇用するなど、日本との関わりが深い企業であることを知りました。さらに、北部準州のホームページを調べてみると、1900年代初頭から太平洋戦争が始まるまでに、豪州北部から北西部にかけて、約4000人の日本人が真珠採取及び真珠産業に携わっていたことも判りました。こうした日本との交流は、太平洋戦争で一旦途切れますが、北部準州と日本との間の戦後の和解の歩みと、今日の交流関係を、3日間の駆け足ですが、できる限り学びたくダーウィンに向かいました。

18日到着初日の夜は、豪州海軍クナワラ基地司令主催の伊号124潜水艦追悼夕食会に出席しました。同潜水艦は、ダーウィン初爆撃の前月である1942年1月20日に、豪海軍掃海艇 Deloraine と交戦し、撃沈され、80名の乗組員が亡くなられています。この慰霊夕食会を豪州海軍が初めて主催し、鈴木駐豪大使が主賓で招待され、私も同席させて頂いた次第です。大使からは、過去の振り返りと同潜水艦にまつわる北部準州関係者の貢献に触れつつ、日豪防衛協力の重要性、最近の自衛隊と豪国防軍の協力関係の高まりについて言及した上で、終戦後の80年前、今日の日豪の緊密な安全保障協力を誰も想像できなかったでしょうと述べ、参加者に大きな共感を呼んでいました。



翌19日には、米海軍 Peary 号沈没追悼式典に鈴木大使と共に出席し、献花を行って参りました。この式典は、ダーウィン爆撃の日に撃沈された Peary 号の追悼式典で、北部準州豪米協会の主催で行われた式典です。豪のマールズ副首相兼国防大臣、ヘギー北部準州行政官（州の総督に相当）も出席されるとともに、米関係者も出席しましたが、鈴木大使も日本を代表してスピーチをし、昨年11月のダーウィンでの日米豪防衛相会談のために来訪した日米豪防衛相によるセノタフ戦争記念碑での献花に触れつつ、戦後和解の道程とその過程における人と人とのつながりの重要性、日米豪防衛協力関係の深化について述べ、犠牲者への追悼を行いました。出席者は、その後、徒歩で、ダーウィン市主催のダーウィン空爆83周年追悼式典に移動しました。この式典でもマールズ副首相兼国防相がスピーチを行い、犠牲者への追悼とともに、鈴木大使の同式典への参加に言及し、昨年11月に日本の防衛相が史上初めてダーウィンを訪問したことにも触れつつ、日豪関係について、かつての敵が最も強固な友人関係になった旨述べていたことが非常に印象に残りました。その後、鈴木大使、トリブル米総領事とともに、私も献花を行いました。



フィノキアーロ北部準州首席大臣

フィノキアーロ北部準州首席大臣は、エネルギッシュな若い女性リーダーですが、18日夜の上記海軍主催夕食会で初めてご挨拶させていただいた際には直ぐには首席大臣と気づかないほど、気さくな方でもありました。同首席大臣は、上記全ての式典に出席され、一連の式典を締めくくる形でレセプションも主催されました。その主催者挨拶では、83年前のダーウィン爆撃の教訓は、北部準州が豪州の国防の最前線にあり、そして同爆撃を乗り切ることが民主主義を守る代価であったこと、そして2012年からの米海兵隊の駐留開始、昨年11月の中谷防衛相の日本の防衛相としてのダーウィン初訪問に端的に示される近年の日本との防衛協力を見れば、今日の式典が、日本が戦後民主主義国家として、経済面だけでなく戦略面でも豪州と緊密な友人となったこと、そして北部準州がインド太平洋地域の文脈の中で要衝であることを確認する重要な機会となったとの趣旨を述べられ、非常に印象深かったです。

レセプション後、改めて首席大臣を表敬しました。同首席大臣からは、インペックス社によるイクシス（Ichthys）・プロジェクトが大きな経済効果を北部準州にもたらしているとした上で、ダーウィン湾を臨む首席大臣執務室ベランダから、同プロジェクトからのLNG等を運ぶ船を2日に一度は見かけ、日本との絆の深さを感じるとの話がありました。それに加え、北部準州は重要鉱物資源も豊富にあり、CCS、水素事業のポテンシャルも大きく、日本企業の更なる進出を期待したいとの熱い期待も示されました。北部準州政府の日本への期待は大きく、日本との経済関係が一層深まることを是非期待したいところで



ダーウィン連合協会

ここまで83年前の伊号124号潜水艦との交戦、ダーウィン爆撃に象徴される日豪の敵対関係が、戦後80年を経て今日の緊密な日豪関係に発展してきたことを述べてきました。しかしながら、戦後の対日感情が直ぐに改善された訳ではなく、1950年代にパスパレー社が真珠養殖に関する日本の専門家をオーストラリアに呼び寄せた際にも対日感情が厳しかったことは先に触れましたが、1959年から1961年にかけて、爆撃で沈められたダーウィン湾内の沈没船を引き揚げた藤田サルベージ社の話に触れない訳にはいきません。藤田サルベージはダーウィン沖合の航行を妨げていた沈没船の撤去に従事しましたが、引き揚げを始めた当初のダーウィンの人々の対日感情は依然厳しく、沈没船を一隻一隻と地道に引き揚げていく中で、その技術力と勤勉な取組みにより、対日感情の改善に大きく寄与したとのこと。さらに、同社の藤田柳吾社長は、1960年のダーウィン連合教会開設時に、新約聖書マタイ福音書にある「(罪を犯した人を) 77回までも赦しなさい」という教えにちなみ、沈没船の金属から作られた77本の十字架を同教会に寄贈するなど、沈没船の引き揚げだけでなく、日豪和解に尽力されました。こちらの教会も訪問し、ご案内して貰った Lauren Merritt さんから、77本の十字架と、2017年のダーウィン空爆75周年の際に藤田社長のご家

族から寄贈された、沈没船のスクリューで作られた墓標もを見せていただき、藤田社長の足跡の大きさを実感しました。



北部準州豪日協会（AJANT）

連合教会をご案内いただいた Lauren Merritt さんが所属されているのが、日本と北部準州の間の友好関係及び相互理解の促進のために 1989 年に設立された AJANT です。この AJANT が、伊号 124 号潜水艦沈没 75 年を機に 2017 年に同潜水艦戦没者の慰霊碑を設置しました。この設置に際しては、北部準州政府と豪国防省から補助金を受けています。この慰霊碑は市内から少し離れているので、AJANT の Janet Truong 会長にご案内いただき、亡くなられた 80 名の乗組員の方々に献花を行いました。

その後、AJANT メンバーの方々と話をする機会があり、北部準州に在住の邦人が約 400 人ということもあってか、メンバーの多くが、日本から移住した方ではなく、日本に関心があるのでメンバーになられたとのことで、こうした方々が、仕事の合間にボランティアとして、日本文化祭や映画祭など様々な行事を通じて、日本文化紹介に取り組まれていることが印象的でした。ダーウィンの親日的雰囲気を見ると、日本文化の認知度を高めていく伸びしろは大きいと感じたので、AJANT のこれまでの活動に感謝するとともに、当館として、AJANT の活動ができる限り支援していきたいと思いました。



インベックス社のイクシス・プロジェクト視察

インベックス社のイクシス LNG プロジェクトは、先ほどの北部準州首席大臣の発言にもあるとおり、当地への経済的恩恵と相俟って、その存在感は極めて大きいです。日本の年間 LNG 輸入量の約 8 % を供給しており、日本へのエネルギー供給の面での役割も大きいとのことで、最終日の 20 日に、ダーウィン市内中心部から車で 4、50 分ほどの場所にある同プロジェクトの施設を視察しました。可燃物を取り扱っていることから、作業服に着替え、携帯電話等の電気製品も預け、しっかりと事故防止策を取った上で、中に入ると広大な敷地に LNG タンクや発電施設など巨大な設備が立ち並び、LNG タンカーへの LNG 船積み作業も見ることができました。こうした LNG タンカーは平均して 3 日に一度出航するとのことでしたが、LNG 以外にも LPG やコンデンセートを運搬するタンカーも出航するとのこと、北部準州首席大臣の 2 日に一度は、本プロジェクトとの間を往来するタンカーを見かけるとの発言は、よく観察している発言だと思ったところです。また、近い将来の脱炭

素化計画についても説明を聞くことができました。このプロジェクトは400億米ドルに上る巨額投資プロジェクトだったということで、長期にわたり安定した運用が見通せる強固な日豪の信頼関係なくしては実現できなかった大プロジェクトと思いました。



北部準州は面積は日本の3倍以上でありながら、人口規模は約26万人と小さいのですが、その中での日本の経済及び防衛分野での存在感はかなり大きいと実感しました。今後も、そうした分野で日本が北部準州との協力関係を強めていくとともに、日本文化についても理解と交流を深めていくことが、日本と北部準州との関係強化のために重要と感じました。当館としても、北部準州との協力関係の推進に知恵を出していければと思います。